

次の文章は源俊頼としよりのが著した『俊頼髓脳』の一節で、殿上人たちが、皇后寛子のために、寛子の父・藤原頼道の邸内で船遊びをしようとするところから始まる。

1 皇后に仕える役人たちが集まって、「船をどうするのがよいだろうか」、紅葉(の枝)を多く取りに行かせて、船の屋根に飾り、船を操作する人は侍で若いと見受ける侍を指名したところ、急に(今回の催しにふさわしいよう)狩袴を染めるなどして派手にした。その(船遊びの)日になって、人々が、皆参上して集まった。「御船の用意はできているか」とお尋ねになったので、(宮司は)「皆用意できております」と申し上げて、その時間になって、島陰から漕ぎ出てきたのを見ると、全体が華やかな印象の船を二艘、飾り立てて出てきた様子は、まことにすばらしかった。

2 人々は、皆それぞれの船に乗り分かれて、管絃の楽器などを、皇后寛子からお借り申し上げて、演奏をする人々を、船の前方に配置し、徐々に船を動かすうちに、南の普賢堂で、宇治の僧正(覚円)が、まだ僧都の君と申し上げていた時、御祈禱をしていらつしやったが、こういうこと(船遊び)があるというので、すべての僧たち、長老も、若い僧も、集まって、庭に居並んでいた。(身分の低い)童や、お供の法師に至るまで、花模様(の刺繍)をした装束を着て、僧たちのうしろに控えながら群がっていた。

3 その中に、良暹(りやうぜん)という歌詠み(がいたの)を、ある殿上人は、見知っていたので、「良暹はいるのか」とお尋ねになったので、良暹は、目を細めて笑って、平伏しているのと、側に若い僧がいたのが(彼と) 知って、「さようでございます」と申し上げたところ、「あの者を、船に召して乗せて連歌などさせるのは、どうだろうか」と、もう一つの船の人々に相談を持ち掛け申し上げたところ、「どうだろうか。あつてはならぬことだ。後の世の人が、『そう(身分の低い僧を船に乗せること)までしなくてもよかるうものだ』、とか言うだろう」と答えたので、それもそうだと、乗せずに、ただその場で連歌などを詠ませようなどと決めて、(良暹のいる場所の) 近くに船を漕ぎ寄せて、「良暹、この場にふさわしい連歌などをして申し上げよ」と、人々がおっしゃったので、(良暹は) 気の利いた者で、もしかするとそういう事もあるかもしれないと思つて、用意していたのだろうか、そう聞くとすぐにも聞もあけずに、側の僧に何か言つたので、その僧は、もったいぶつて船の方に近づいていて、

『もみぢ葉のこがれてみゆる御船かな』(紅葉の葉が焦がれるように紅葉して見える漕がれる御船だなあ) 「焦がれて」と「漕がれて」の掛詞。

と申しております」と申しかけてもといた場所に帰った。

4 人々は、これを聞いて、すべての船に知らせて、(続きの句を) 付けようとしたが、(できなくて) 遅かったので、船を漕ぐともなく、ゆっくりと築島をまわつて、一まわりするうちに、句を付けて言おうとしたが、句が付られなかったので、むなしく時が過ぎていった。「どうした」「遅い」と、互いに船どうしで言い争つて、築島を二まわりしてしまった。それでもまだ、(続きの句を) 付けることができなかつたので、船を漕ぐのはやめて、島の陰で、「どう考えても恰好の悪いことだ、この返しを今まで付けられないのは。日はすっかり暮れてしまった。どうしようか」と、今は、句を付けようという気もなく、付けないままに終わることを嘆くうちに、何も考

えられなくなってしまった。

5 大げさに管絃の楽器をお借し願って降ろして船に乗せたのも、(興ざめして)少しも、かき鳴らす人もなく(船遊びは)終わってしまった。このようにあれこれ言っているうちに、普賢堂の前に大勢集まっていた人々も、みな立ち去った。人々は、船から降りて、(皇后様の)御前で管絃の遊びをしようかなどと思っていたけれど、この予定が狂ってしまったので、みな逃げるように去ってそれぞれいなくなってしまった。官司は、(せっかく)準備をしたけれど、無駄になつて終わってしまった。

問4 散木奇歌集(さんぼくきかしゅう)

人々がたくさん石清水八幡宮の御神樂の催しに参上していたところ、それが終わつて翌日、別当法印の光清が御堂の(前の)池の釣殿に人々並んで座つて演奏していたところ、「光清、連歌を作ることを習得したと思う。今すぐに連歌を付けてみたい」などと申ししていたときに、「形式どおりに」と言つて申し上げた(俊重の歌)、

釣殿の下には魚は住まないだろうか

俊重

光清はしきりに考えたけれど、付けられずに終わってしまったことなどを、帰ってきて語つたところ、試みに、というこゝで、

” 梁(はり) ” ならぬ釣” 針 ” の姿が水底には見えつつ

俊頼